

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和 8 年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第 4 号（7 月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149



テレホンサービス：099-296-6430
（7～9月）：099-296-6431

ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理、安全使用
2. 作物に対する安全 適期、適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川、湖沼、海等への汚染防止)
(養蚕、養蜂等への危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

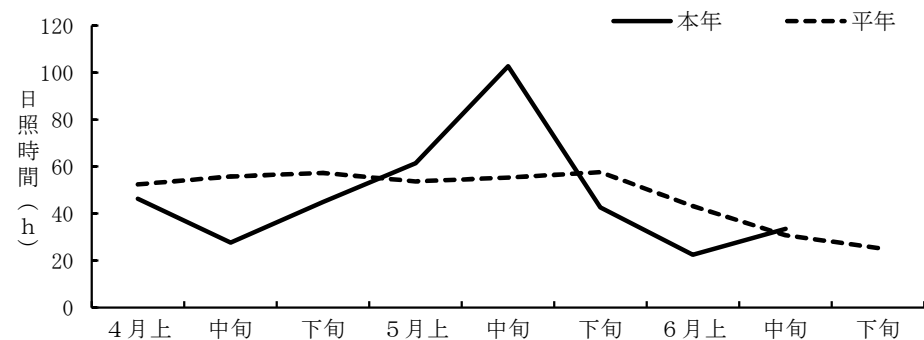
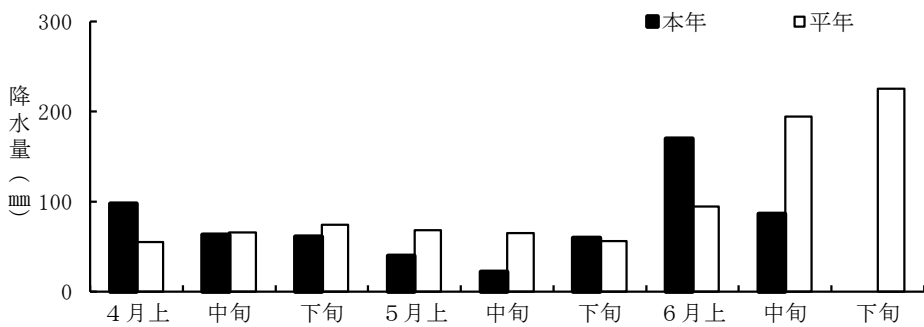
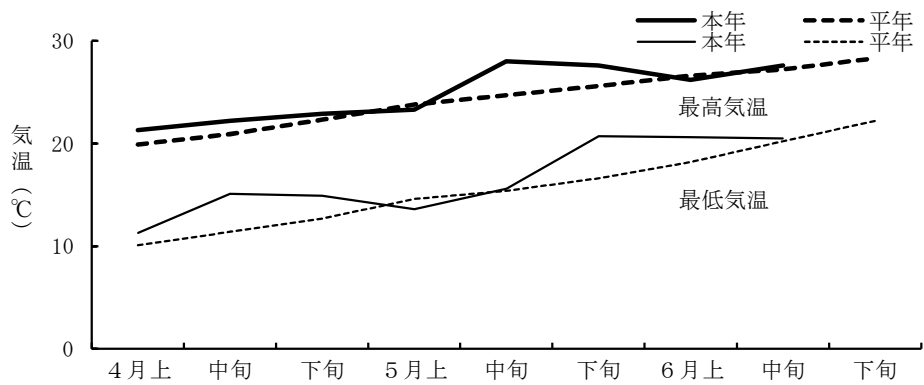
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（6月27日～7月26日） 令和8年6月25日 鹿兒島地方気象台発表

要素	地域	確率 (%)			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部 奄美地方	10	40	50	九州南部の気温は高く、奄美地方は平年並みか高い。九州南部、奄美地方ともに降水量及び日照時間は、ほぼ平年並みの見込み。
		20	40	40	
降水量	九州南部 奄美地方	40	30	30	
		30	30	40	
日照時間	九州南部 奄美地方	30	30	40	
		40	30	30	

II. 4～6月の気象情報（鹿兒島地方気象台 観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通 作物	早期水稲	いもち病（穂いもち）	やや少	やや少
		斑点米カメムシ類	多	多
野 菜	イチゴ（苗床）	うどんこ病	やや多	やや多
		炭疽病	並	並
		ハダニ類	多	多
	サトイモ	疫病	やや少	やや少
	野菜・花き共通	ハスモンヨトウ	やや少～多	やや多
花 き	キク（施設）	白さび病（県本土）	やや少	やや少
		ハダニ類（県本土）	少	やや少
		アザミウマ類（県本土）	やや多	多
果 樹	カンキツ	そうか病（果実）（県本土・熊毛地域）	少	少
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		かいよう病（果実）（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
茶 樹	チャ	炭疽病	多	多
		輪斑病	やや少	やや少
		チャノコカクモンハマキ	多	多
		チャハマキ	並	やや多
		チャノホソガ	やや多	多
		チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや多
		チャノキイロアザミウマ	少	やや少

I. 普通作物

1. 早期水稲

(1) いもち病（令和8年度技術情報第10号、6月8日付参照）



ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

葉いもちの発生面積率 10%（平年 17%）

：やや低い

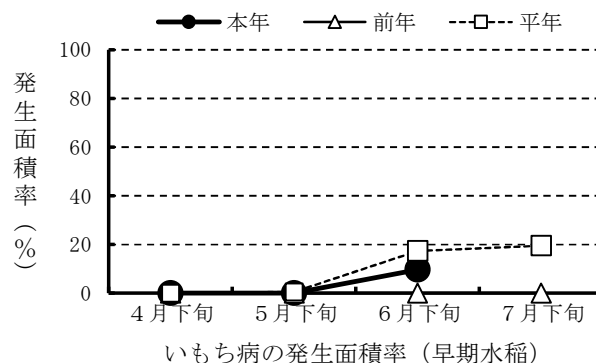
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ほ場を見回り、葉いもちの発生を確認

する。ほ場の中心など湿度の高い場所では、

坪状に発生することがあるので見落とさないようにする。また、本年は一部のほ場で、多発が認められている。

(イ) 葉いもちの発生ほ場及びその周辺ほ場では、「なつほのか」等の晩生品種で穂ばらみ期から穂ぞろい期に、液剤または粉剤により、穂いもちの防除を実施する。



いもち病の発生面積率（早期水稲）

(2) 斑点米カメムシ類（令和8年度注意報第3号、6月11日付参照）

（クモヘリカメムシ、アカスジカスミカメ等）



ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生時期 出穂期以降

(ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠（早期水稲周辺のイネ科雑草地調査）

(ア) 調査結果 発生量：多

捕獲箇所率 83.3%（平年 68.1%）：高い

平均捕獲虫数 13.0頭（平年 7.5頭）：多い

発生程度の高い箇所が認められる（+）

(イ) 県全体における斑点米カメムシ類の程度別発生箇所割合は、中程度以上が 37.5%（平年：13.7%）と平年より高かった。

(ウ) 種別構成比はアカスジカスミカメが 52.4%と最も高く、次いでクモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシの順であった。

(エ) クモヘリカメムシの平均捕獲虫数は 5.8頭（平年 3.2頭）であり、過去5か年で2番目に多かった。

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 斑点米カメムシ類による斑点米の混入は米の検査等級格下げにつながり、特に早期水稲では、品質低下の主な要因となる。

(イ) 斑点米被害が多い地域では、穂揃期と穂揃期の7～10日後（乳熟後期）の2回防除を徹底する。特に乳熟後期に幼虫の発生がないよう防除する。

(ウ) 防除は農薬の使用基準を遵守し、農薬がほ場外に飛散しないようにする。

2. 普通期水稻

(1) ウンカ類およびコブノメイガの誘殺虫数

セジロウンカ：60W予察灯での初誘殺日は4月25日（平年5月7日）で、平年より早かった。
 トビイロウンカ：60W予察灯での初誘殺日は6月21日（平年6月28日）で、平年より早かった。
 コブノメイガ：フェロモントラップでの初誘殺日は5月23日（平年5月22日）で、平年並みであった。

表1 各種トラップでの誘殺虫数と初誘殺日（農業開発総合センター設置）

月・半旬	セジロウンカ				トビイロウンカ				コブノメイガ	
	60W予察灯		大型吸引トラップ [°]		60W予察灯		大型吸引トラップ		フェロモントラップ [°]	
	本年 ^{注1)}	平年 ^{注2)}	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	(平年) ^{注3)}
5・5	0	2.0	1	0.4	0	0	0	0	5	1.7
6	28	8.8	1	0.9	0	0	0	0	5	2.7
6・1	27	9.5	1	1.1	0	0.1	0	0	4	9.0
2	15	20.6	0	4.9	0	0.0	0	0	5	22.0
3	1	14.0	0	7.2	0	0.2	0	0	1	12.0
4	10	22.0	0	6.9	0	0.4	1	0	4	15.3
5	46	78.6	0	9.5	5	1.8	0	0.4	38	10.7
6		52.2		5.4		7.8		0.9		5.4
合計	127	207.7	3	36.3	5	10.3	1	1.3	62	78.8
初誘殺日	4/25	5/7	5/21	5/25	6/21	6/28	6/20	7/11	5/23	5/22

注1) 誘殺数：6月23日現在

注2) 平年は2016年～2025年の10年間の平均

注3) (平年)は2018年～2025年の8年間の平均

なお、最新の誘殺状況は、ホームページ (<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/trap.html>) を参照



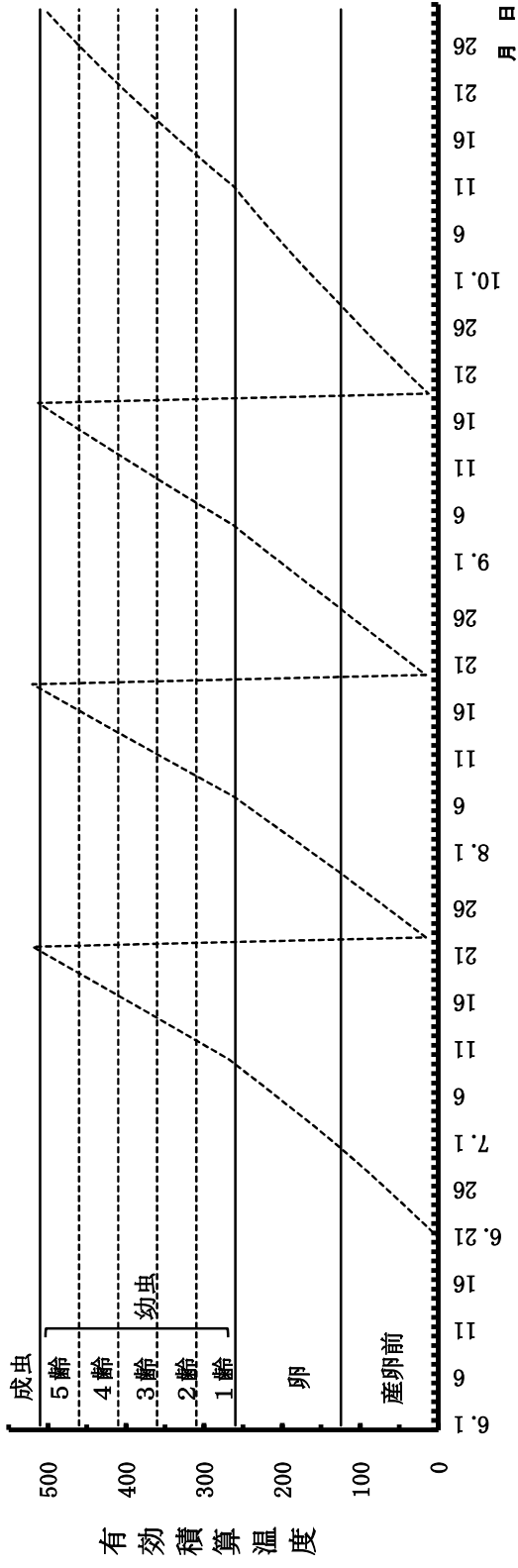


図1 トビイロウンカの有効積算温度による発生経過予測図（南さつまま市金峰町）

注1) 起算日：60W予察灯に誘殺された6月21日

注2) 気温：加世田のアメダスポイントを利用（6月24日以降は平年値）

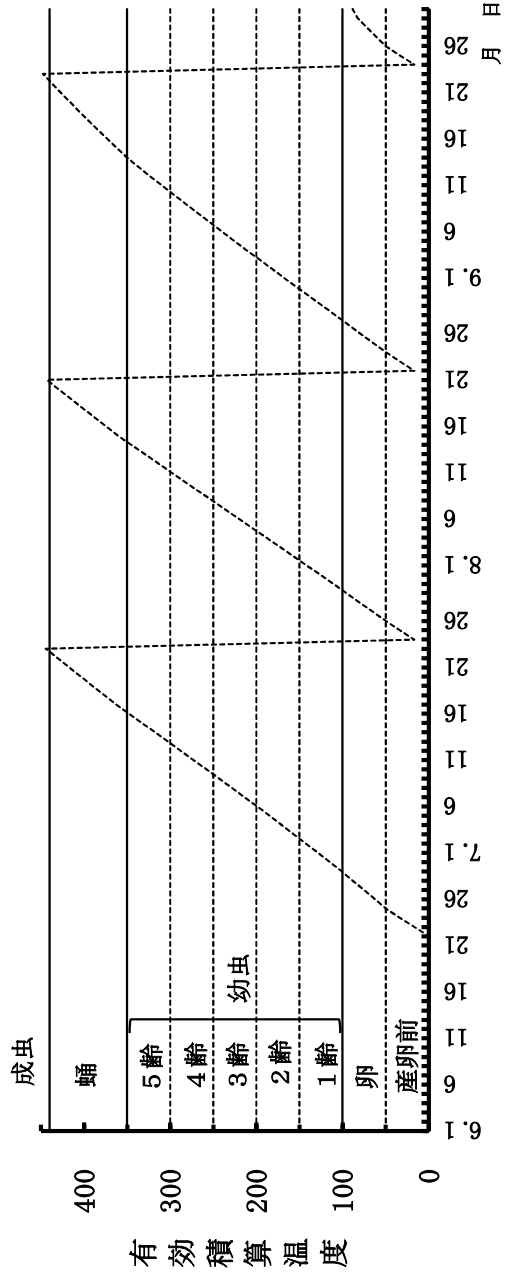


図2 コブノメイガの有効積算温度による発生経過予測（南さつまま市金峰町）

注1) 起算日：60W予察灯において誘殺が多かった6月22日

注2) 気温：図1と同じ

II. 野 菜

1. イチゴ（苗床）

(1) うどんこ病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 55%（平年 46%）：並

発生程度の高いほ場を認めた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

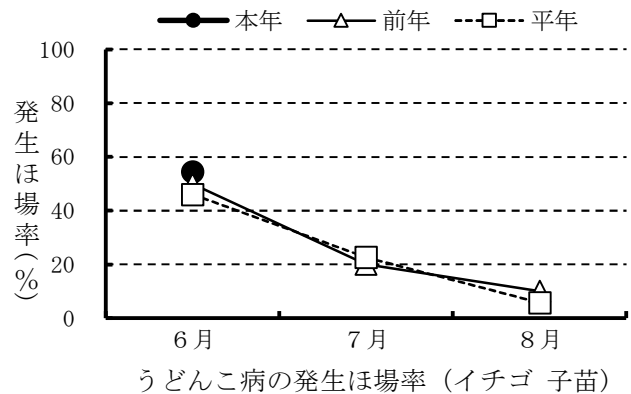
(ア) 本病が発生しやすい葉裏をよく観察し、早期発見と初期防除に努める。

(イ) 雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にあるので注意する。

(ウ) 発病葉や古葉は除去し、ほ場外へ持ち出して処分する。

(エ) ランナー切り離し前までの防除を徹底し、葉裏や下位葉に薬液が十分付着するよう散布する。

(オ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



うどんこ病の発生ほ場率（イチゴ 子苗）

(2) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 0%（平年 1%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 雨よけ対策を行い、子苗数が確保でき次第、親株（二段階育苗含む）は、速やかに処分する。

(イ) 苗は十分な間隔を置いて並べ、通風を図る。

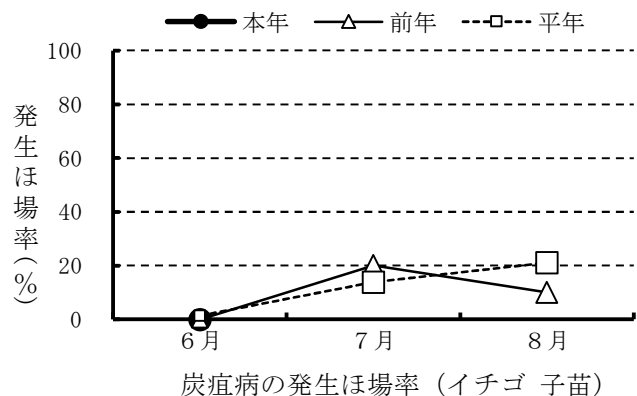
(ウ) 台風、長雨等の雨水の跳ね上がり注意到し、灌水は可能な限り水滴が細かい灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。

(エ) 古葉は潜在感染している場合が多いので、新葉展開後は降雨時を避けて摘葉する。

(オ) 生育不良の親株や萎凋した苗は、直ちに除去し、ほ場外で適切に処分する。

(カ) 予防散布は10～14日間隔で行い、株元、ランナー、葉裏などに付着するよう十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

(キ) 育苗ほ場周辺や育苗ベンチ下の除草を徹底する。



炭疽病の発生ほ場率（イチゴ 子苗）

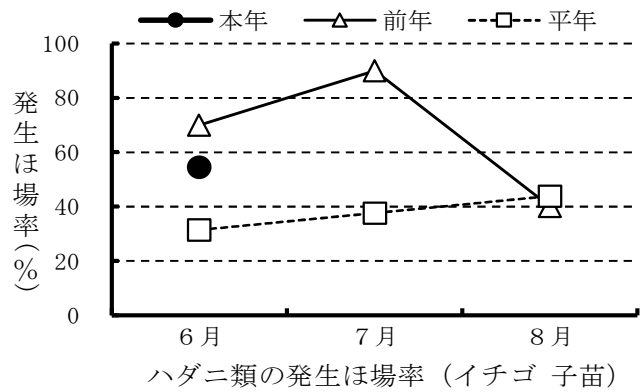
(3) ハダニ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率 55% (平年 31%)
：やや高い
発生程度の高いほ場を認めた (+)
- (イ) 気象予報
気温：高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 気温の上昇とともに急激に増殖するので、管理作業時に注意深く観察し、早期防除に努める。
- (イ) 寄生葉や摘葉した葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- (ウ) 農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから、薬液が葉裏までよく付着するように丁寧に散布する。
- (エ) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統の農薬の連用を避け、気門封鎖剤など作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布に努める。

2. サトイモ

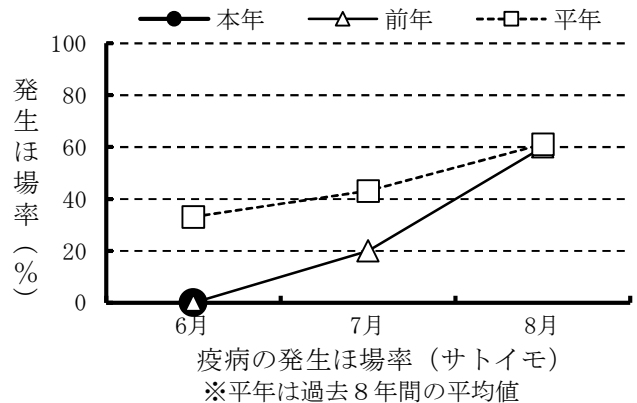
(1) 疫病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率 0% (平年 33%)
：やや低い



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病は7月から発生が増加する傾向にある。ほ場の縁部分で発生しやすいため、ほ場周囲をよく見回り、早期発見に努める。
- (イ) 発病茎葉は発生源となるので、摘み取ってほ場外へ持ち出し適正に処分する。
- (ウ) 降雨が続くと急激に発生が拡大するので、発生を確認したら直ちに治療効果がある農薬を散布する。効果的な散布方法については、令和3年度鹿児島県農業開発総合センター普及情報 (https://www.pref.kagoshima.jp/ag11/pop-tech/nenndo/documents/documents/97450_20220613131310-1.pdf) を参照。



3. 野菜・花き共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 イチゴ、サトイモ、キク等
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少～多

作物名	発生ほ場率 (%)		概評
	本年	平年	
イチゴ	0	3	やや少
サトイモ	60	12	多
キク	0	3	やや少

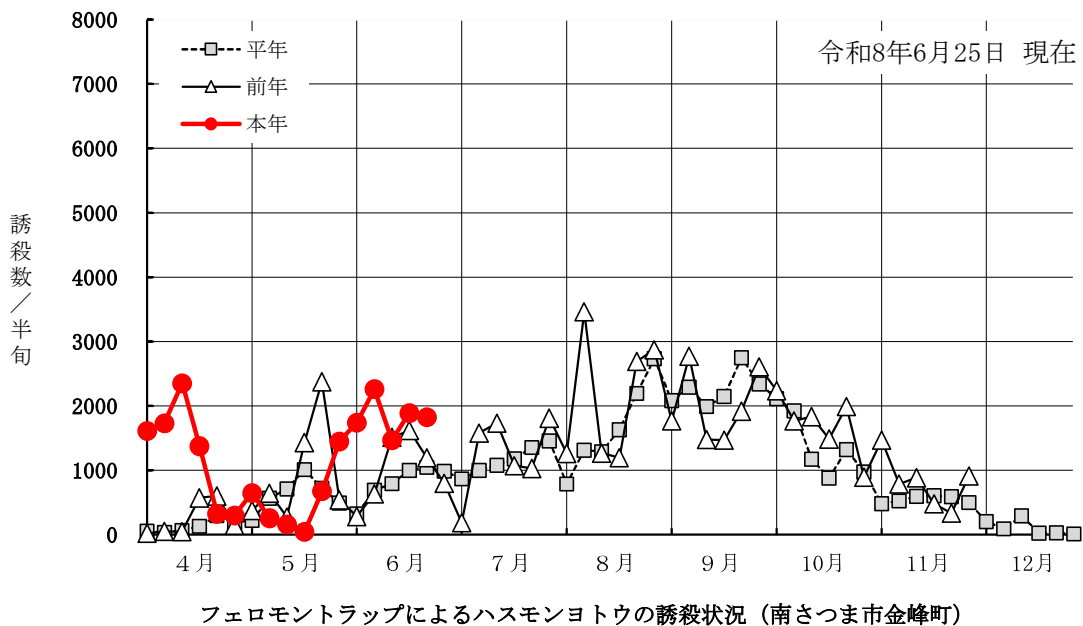
表 5月1半旬～6月4半旬のフェロモントラップ総誘殺数

	トラップ誘殺数 (頭)			概評
	本年	前年	平年 ^{注)}	
南さつま市	10,617	9,703	6,539	多
鹿屋市	3,832	4,530	—	

注) 平年は2016年～2025年の10年間の平均、但し鹿屋市は2026年からのデータのため平年値なし

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 若齢幼虫は集団で表皮を残して食害し、白変葉を生じるので、ほ場を見回り早期発見に努める。
- (イ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (ウ) 中・老齢幼虫になると農薬の効果が低下するので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。
- (エ) ジアミド系農薬に対して感受性低下が認められる。他の使用農薬も含め、散布後の効果を確認する。



Ⅲ. 花き

1. キク

(1) 白さび病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0%（平年 12%）：やや低い

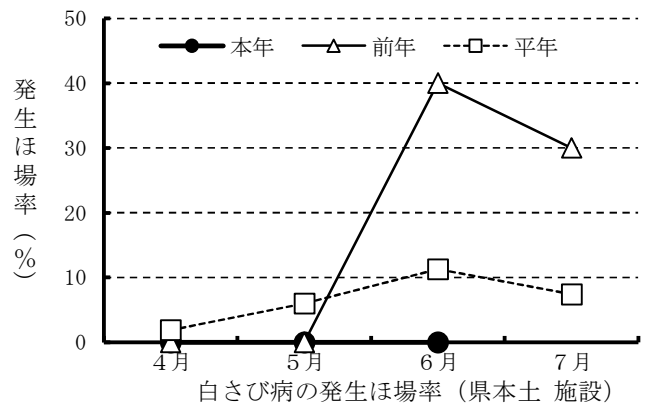
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉は、早めに摘み取って施設外へ持ち出し適正に処分する。

(イ) 通風換気に努め、過湿にならないようにする。

(ウ) 母株からの持込みを防ぐため、葉裏までよく付着するよう予防散布と初期防除を徹底し、無病穂の育成に努める。

(エ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率 10%（平年 36%）：低い

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

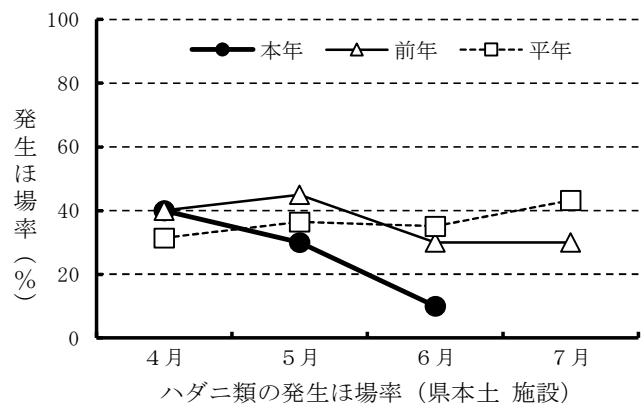
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよく付着するように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

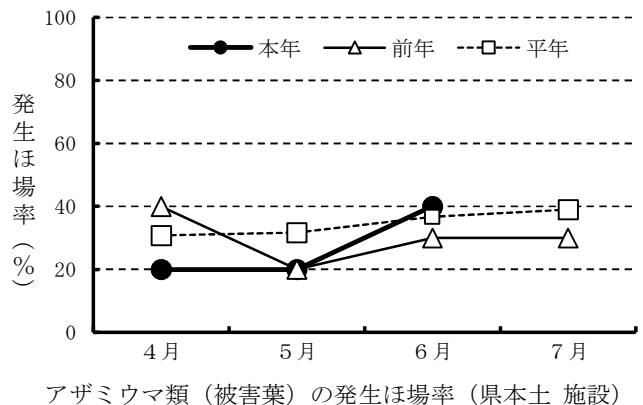
(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 40%（平年 37%）：並

発生程度の高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) アザミウマ類（クロゲハナアザミウマを除く）の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。
- (イ) クロゲハナアザミウマは、主に中下位葉に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め、発生が認められた場合は、薬液が中下位葉の葉裏まで付着するよう丁寧に散布する。
- (ウ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。
- (エ) アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（TSWV）とキク茎えそ病の病原ウイルス（CSNV）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。
- (オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。
- (カ) 母株や苗は導入時に、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生がないか確認し、持ち込まないようにする。

IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

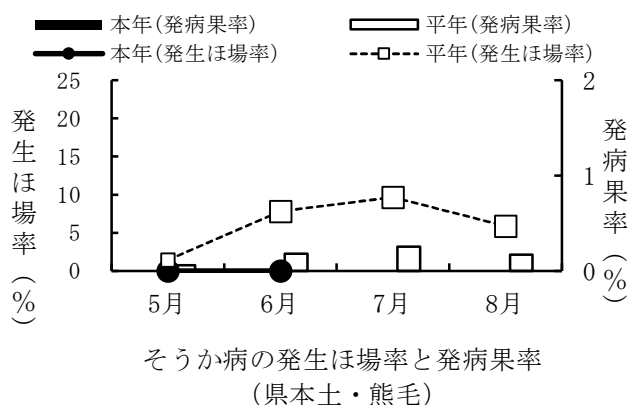
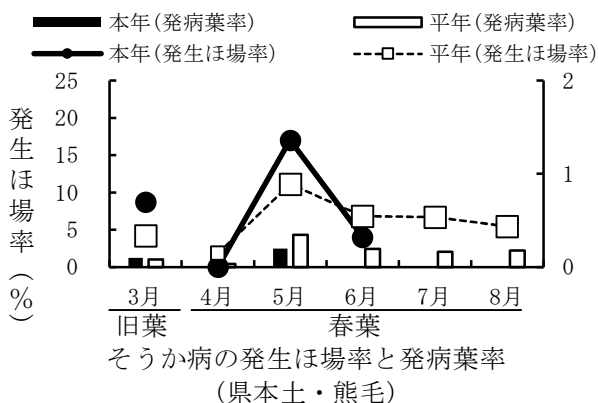
県本土・熊毛地域（果実） 少
奄美地域（果実） やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発生量	やや少	少
発生ほ場率	4%（平年 7%）：並	0%（平年 8%）：やや低い
発病率	0%（平年 0.1%）：並	0%（平年 0.1%）：並



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発生量	並	やや少
発生ほ場率	0%（平年 3%）：やや低い	0%（平年 6%）：やや低い
発病率	0%（平年 0.0%）：やや低い	0%（平年 0.1%）：やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉、発病果は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し処分する。

(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

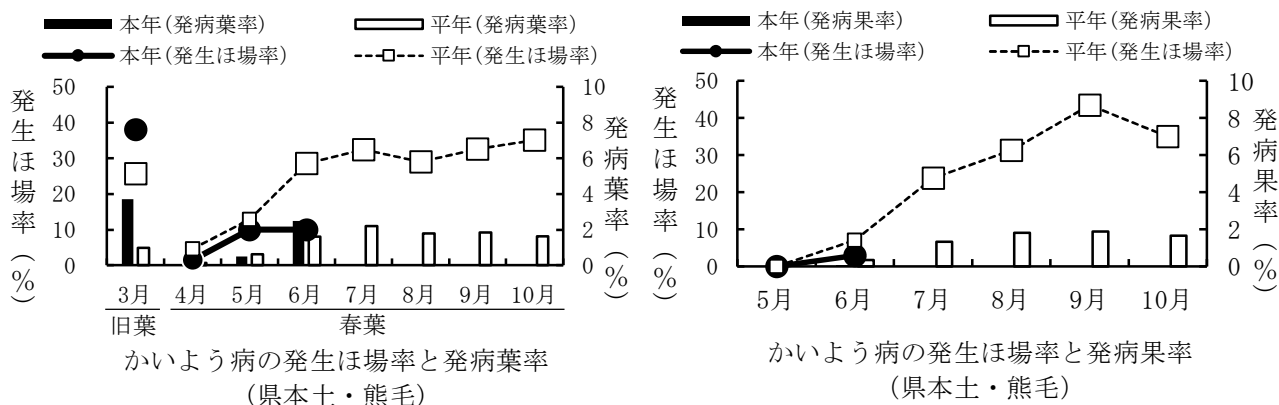
県本土・熊毛地域（果実） やや少
奄美地域（果実） 並

イ 予報の根拠

< 県本土・熊毛地域 >

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発 生 量	少	やや少
発生ほ場率	10% (平年 29%) : 低い	3% (平年 7%) : やや低い
発 病 率	2.5% (平年 1.4%) : 高い	0.1% (平年 0.2%) : 並



< 奄美地域 >

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発 生 量	やや少	並
発生ほ場率	0% (平年 9%) : やや低い	0% (平年 0%) : 並
発 病 率	0% (平年 0.1%) : やや低い	0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染前の防除効果が高いので、強風雨等の襲来前には、予防散布に努める。

(イ) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除に努める。

(ウ) 強風雨等により葉や果実に生じた傷口から感染するので、防風ネットの設置や防風樹の管理に努める。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発 生 量

県本土・熊毛地域 やや少

奄 美 地 域 並

イ 予報の根拠

< 県本土・熊毛地域 >

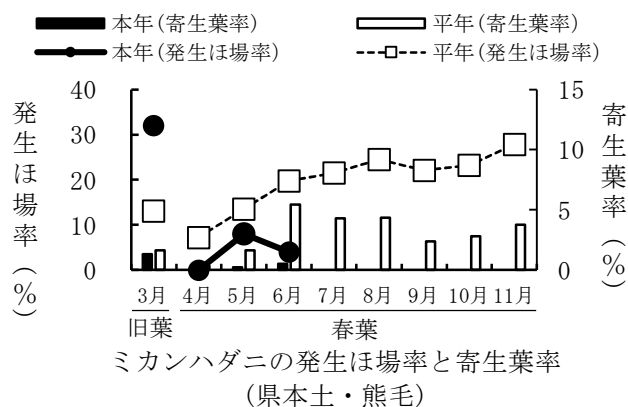
(ア) 調査結果 (春葉) 発 生 量 : 少

発生ほ場率 4% (平年 20%) : 低い

寄生葉率 0.5% (平年 5.9%) : 低い

(イ) 気象予報

気温: 高い (+)



<奄美地域>

- (ア) 調査結果 (春葉) 発生量 : 並
発生ほ場率 0% (平年 1%) : 並
寄生葉率 0% (平年 0.0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 1葉当たり雌成虫数 0.5~1.0頭 (寄生葉率で 30~40%) を目安に防除する。また、薬剤抵抗性を生じさせないため、同一系統、同一殺ダニ剤の使用は年 1 回とする。
(イ) 殺ダニ剤の効果が低下したほ場では、今後、多発することが懸念されるため、夏季用マシン油乳剤 (97%) を主体とした防除を行う。
(ウ) ただし、夏季用マシン油乳剤は散布後に、油浸斑の発生や光合成低下等による果実品質への影響が懸念されることから、高温時の使用を避ける。そのため、使用時期は、県本土では温州 7 月上旬まで、中晩柑類 7 月下旬まで、熊毛・奄美地域の中晩柑類は梅雨明けまでとする。

(4) ゴマダラカミキリ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 多
奄美地域 並

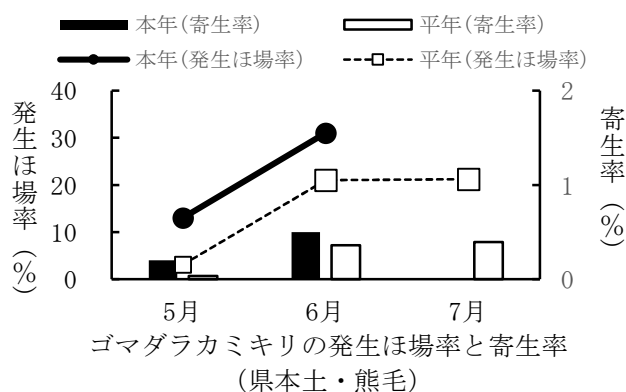
イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

- (ア) 調査結果 (春葉) 発生量 : 多
発生ほ場率 31% (平年 23%) : 高い
寄生率 0.5% (平年 0.4%) : やや高い

<奄美地域>

- (ア) 調査結果 (春葉) 発生量 : 並
発生ほ場率 0% (平年 0%) : 並
寄生率 0% (平年 0%) : 並



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本土・熊毛地域の産卵は 7 月上旬頃が盛期で、8 月まで続く。
(イ) 朝夕、成虫の活動が緩慢な時間帯に捕殺する。卵・幼虫の圧殺・刺殺の効果は確実である。
(ウ) 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。
(エ) 幼木の主幹地際部を物理的に遮断 (ストックカバー法) すると、成虫の産卵を防止できる。

ゴマダラカミキリの発育ステージ別防除方法

【本土・熊毛地域】

時期	5月			6月			7月			8月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生態	←			成虫発生期		→					
				←			産卵期		→		
				←			幼虫食入期		→		
物理的防除法	←			成虫の捕殺		→					
				←			卵の圧殺・幼虫の捕殺		→		
化学的防除法	←			殺虫剤散布		→					

【奄美地域】

時期	5月			6月			7月			8月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生態	←			成虫発生期		→					
	←			産卵期		→					
	←			幼虫食入期		→					
物理的防除法	←			成虫の捕殺		→					
	←			卵の圧殺・幼虫の刺殺		→					
化学的防除法	←			殺虫剤散布		→					

防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) 黒点病

ア 本病は落花直後～梅雨期に感染が多くなる。

イ 薬剤防除は累積降水量 200～250mm を目安とするが、近年、数日でこの雨量を超える場合が多い。薬剤散布間隔は気象情報に留意し、簡易雨量計等の園内設置により防除の目安とする。

ウ 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

2. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ, ツヤアオカメムシ)

ア 6月、予察灯におけるツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシの誘殺虫数は出水市、いちき串木野市、南さつま市、鹿屋市ともに増加せず、平年と同程度だった。なお、最新の誘殺状況は、ホームページ (<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujosh/trap.html>) を参照



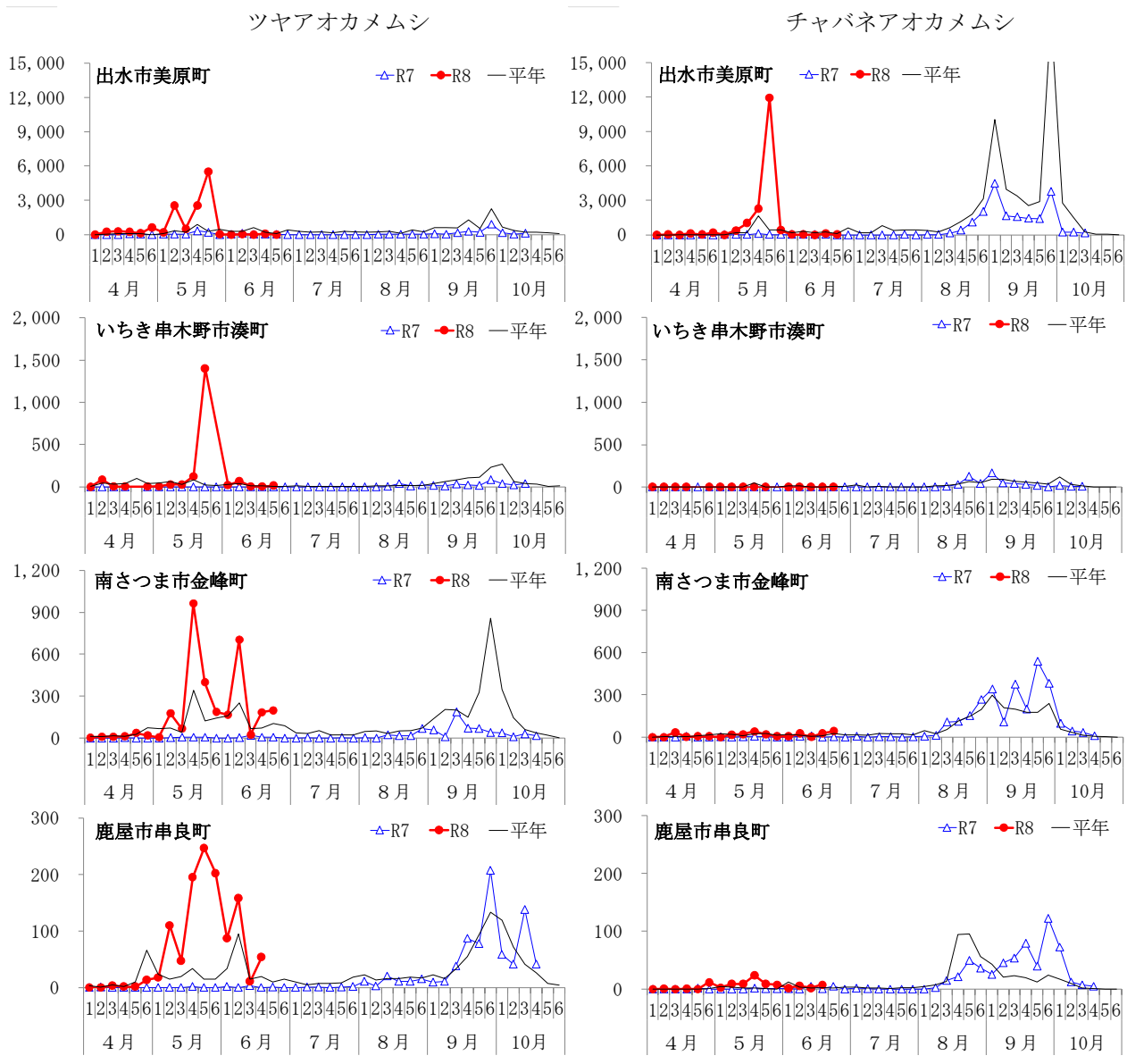


図1 予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

注) 平年は過去10年間の平均値。捕虫方法は南さつま市金峰町100w水銀灯，鹿屋市は捕虫用蛍光灯と白色蛍光灯（20W）を併設，他は40W捕虫灯。

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率62%（平年50%）：やや高い
 1㎡当り病葉数26.4枚（平年7.5枚）：多
 発生程度の高いほ場が認められた（+）

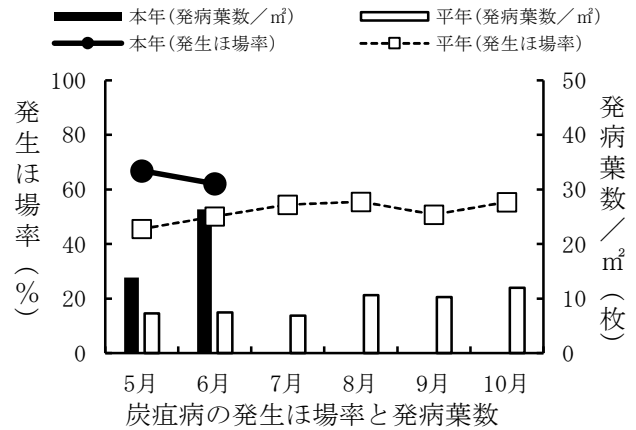
ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) やぶきた、おくみどりなどの本病に

弱い品種や多発ほ場では、萌芽～1葉期に予防散布を行う。

- (イ) 三番茶期は萌芽から摘採までの期間が短いので、農薬の使用時期（摘採前日数）を遵守する。

- (ウ) 更新園では、裾部に残った病葉が伝染源となり再生芽へ感染するため、1～3葉期に予防効果のある農薬で防除する。



(2) 輪斑病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

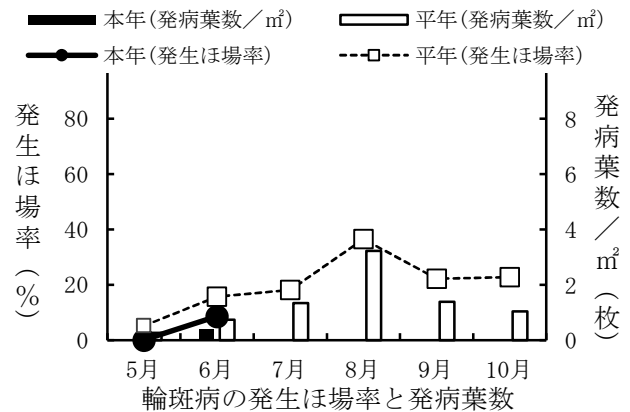
- (ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率9%（平年16%）：やや低い
 1㎡当り病葉数0.4枚（0.7枚）：やや少

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 農薬の使用時期は、保護殺菌剤を使用する場合は摘採直後に、浸透性殺菌剤を使用する場合は摘採3日後までに散布する。

- (イ) やぶきた、おくゆたかななどの本病に弱い品種では、更新園においても再生芽の整枝直後に農薬散布を行う。



(3) チャノコカクモンハマキ、チャハマキ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 多
チャハマキ やや多

イ 予報の根拠

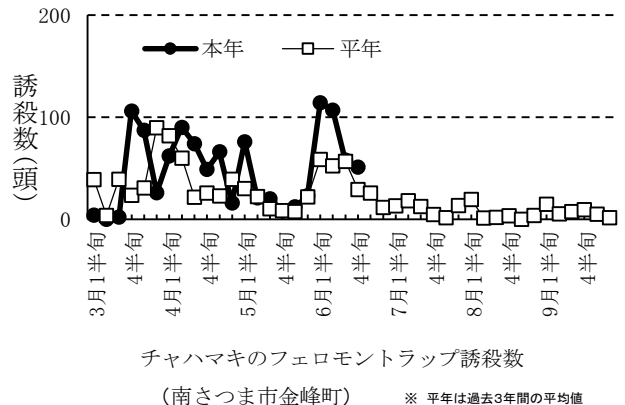
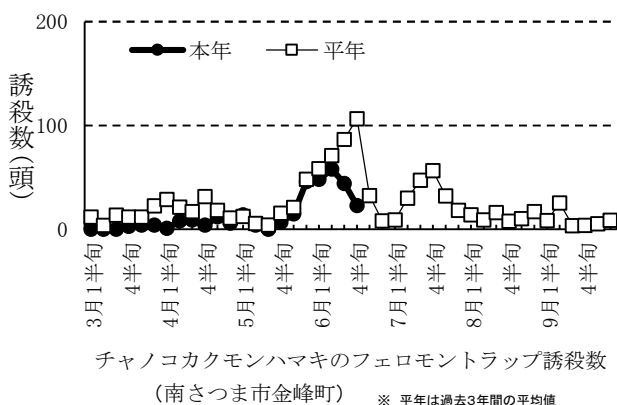
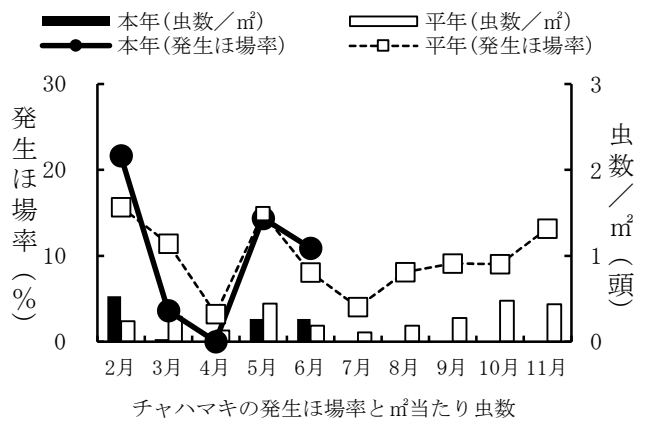
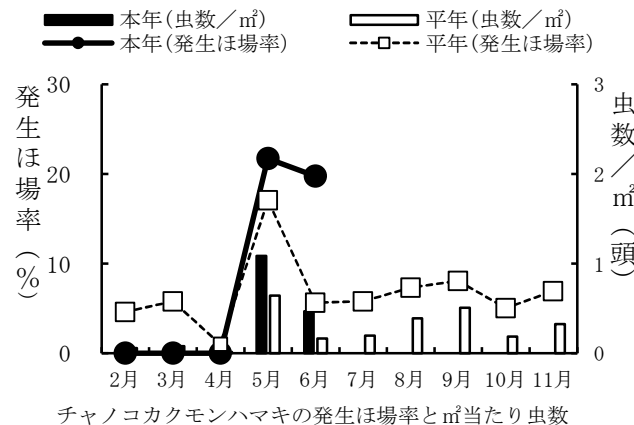
- (ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	多	並
発生ほ場率	20% (平年6%) : 高い	11% (平年8%) : 並
m ² 当たり虫数	0.5頭 (平年0.2頭) : 多	0.3頭 (平年0.2頭) : 並
チャノコカクモンハマキでは、発生程度の高いほ場を認めた (+)		
【南さつま市金峰町のフェロモントラップ】		
誘殺数* (5月4半旬~6月4半旬)	241頭 (平年408頭)	373頭 (平年235頭) (+)

* 平年は、過去3カ年の平均

(イ) 気象予報

気温：高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生量・発生時期は地域間差があるので、フェロモントラップ等で発生状況を把握する。
- (イ) 農薬による防除適期は、ふ化～2齢期（発蛾最盛日の10～15日後）である。
- (ウ) ジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(4) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多

【巡回調査】

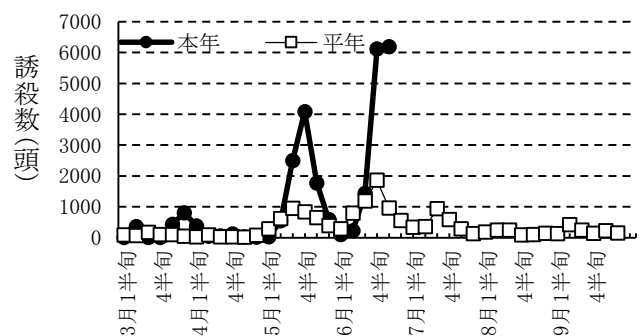
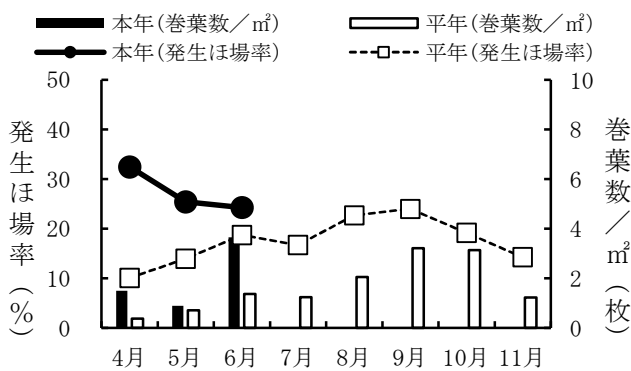
発生ほ場率 24% (平年 19%) : やや高い
 m²当り巻葉数 3.6 枚 (平年 1.4 枚) : 多

【南さつま市金峰町フェロモントラップ】

誘殺数* (6月1半旬~6月4半旬) 13,924 頭 (平年 4,090 頭) (+) * 平年は、過去3カ年平均

(イ) 気象予報

気温：高い (+)



チャノホソガの発生ほ場率とm²当たり巻葉数

チャノホソガのフェロモントラップ誘殺数

(南さつま市金峰町)

* 平年は過去3年間の平均値

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 三番茶期の萌芽～1葉期に防除を行う。
- (イ) 三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、農薬の使用時期（摘採前日数）を守り、摘採前の隣接茶園へのドリフトがないように注意する。
- (ウ) IGR 剤及びジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。
- (エ) フェロモントラップでの誘殺数が増加しているため、萌芽期に成虫の発生が多いほ場では、防除を行う。

(5) チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量
 チャノミドリヒメヨコバイ やや多
 チャノキイロアザミウマ やや少

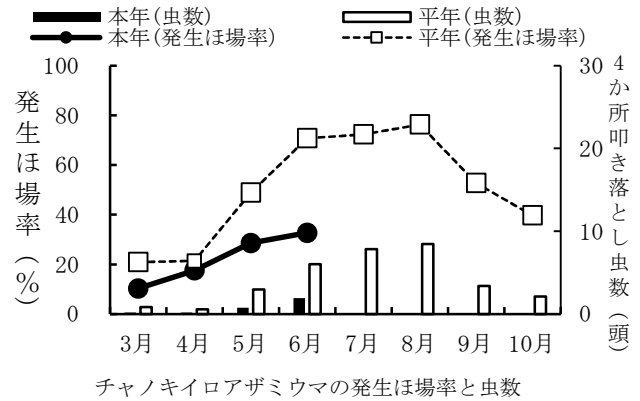
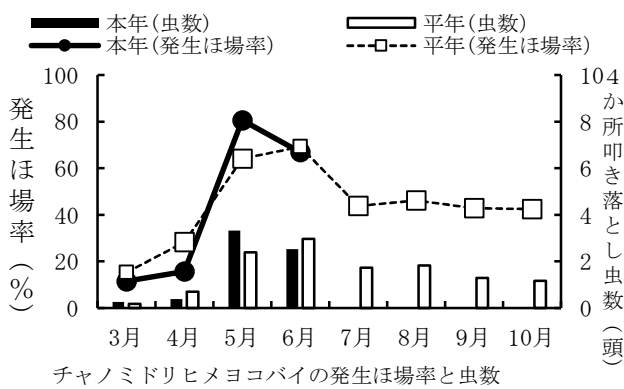
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果

巡回調査	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	並	少
発生ほ場率	67% (平年69%) : 並	33% (平年71%) : 低い
虫数(4か所たたき落とし)	2.5頭 (平年3頭) : やや少	1.9頭 (平年6頭) : やや少
チャノミドリヒメヨコバイでは、発生程度の高いほ場を認めた (+)		

(ウ) 気象予報

気温：高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 新芽を加害するので、三番茶萌芽期頃に防除する。

(イ) 発生が多い場合は、摘採後に摘採残葉や遅れ芽を加害し、次茶期の発生源となるため、摘採後の防除を行う。

防除に関する今月の留意事項

1. 農薬の使用について

近年、栽培の多様化により、同一地域でも芽の生育時期や防除時期が園地により異なる。このため、農薬を散布する際は、摘採前日数を遵守するとともに、隣接茶園等へドリフトがないように十分注意する。また、摘採前であることを「旗」の設置等により周辺の生産者に知らせるなど、ドリフトが起こらないよう注意喚起を行う。

2. 更新園について

更新園は、芽の再生が園によって異なり生育期間が長く、萌芽～生育初期に病害虫の集中加害を受けやすい。更新後の生育を順調に進めるため、病害虫対策（炭疽病、茶ノミドリヒメヨコバイ、茶ノキイロアザミウマ、茶ノホソガ、カンザワハダニ等）は適切に行う。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を使用。